

## あちらこちら文学散歩

井本 元 義

「一」ヴェルレーヌの終焉の家

旅をしている時に偶然に名前だけでも知っている芸術家の住んでいた家とか記念碑とかに出会おうと嬉しいものだし、それだけでまた旅の印象が残ることになる。それが目的で行こうとすると前もって資料に目を通していくので、さらに深くなる。訪れて喜んでいくだけではない。その作品を思い浮かべながらその家の壁を触ったり、机に手を触れてみたりすると一種の感動になる。そこから何かのエキスを貰えるのではないかと欲張ってしまう。僕の次の作品にいい影響を与えてくれるのではないかと。

確かに最初は偶然に見つけた喜びだった。それから目的を決めてそれぞれの場所を訪れるようになった。文学だけでなく絵画やその時代にも興味がさらに増した。そして行き当たりばつたりに感想をあちこちの雑誌やブログに書いてきた。すると一貫性のある方向はないがいつかシリーズとしての文章として整理してみたいという気持ちになった。また僕の散歩の記録としても残したかった。生きて歩いて文章が書ける限り続けたい。五十回くらいにはなるだろう。「いままでのものと一部重複もある」同じ場所を訪れる誰かが、僕の感想をふと思いついてもらおうのを想像したりしている。

初めてヨーロッパを訪れた時、疲れ果てるまで歩き続けるのは誰でもだろう。はつきりした目標がなくても古い雰囲気の良い路地などに入り込んだりすると胸のときめきはひとしおだ。パリでの僕の第一発見は迷い込んだ古い「ムフタル通り」だった。通りを示すプレートを見た時に僕はあつと声をあげそうになった。昔、夢中になって読んだ「レ・ミゼラブル」の一節、「マリウスが小走りでムフタル通りを行くと……」が思い出された。ジャン・バルジャンの娘のコゼットを愛する青年マリウスである。僕はまさに物語の、その歴史の真ただ中にあるのだ。五百メートルほどの通りに両側には古いレストラン、カフェ、小さな劇場、お菓子屋、魚屋、八百屋、ワイン屋、チーズ屋が隙間もなく並んでいる。朝市が終わったばかりだったのだろう。石畳にはこぼれた果物や野菜が踏みじられたまま甘い匂いを漂わせている。魚屋の水はまだ柵にあふれている。レストランは開店の準備中だ。買い物客、急ぎ足の人、散歩の人で狭い通りはいっぱいである。

ムフタル通りは短いデカルト通りにつながる。エリート高校のアンリ四がある。またパンテオンの裏になる。僕は絵文字のようなレストランの名前を一つ一つ読んでいく。ぼんやりした頭に突然響くものがある。「ラ・メゾン・ヴェルレーヌ」。上の階のアパルトマンの壁にプレートがある。「ヴェルレーヌが千八百八十六年ここで死んだ」傍によって煉瓦の古い壁を撫でてみる。僕はうつとりとその感触に浸る。何かあたたかい。「巷に雨の降るごとく……」。「秋の日のヴィオロンの溜息の……」がすぐに浮かぶ。大好きな詩人の一人である。この感動は夢ではないか。現実としてこんなにヴェルレーヌが身近に感じられるとは。

彼は、「アルチュール・ランボーとの仲でも知られているが、そのことはまた別に書くとして」五十二歳でこのアバルトマンで死んだ。晩年は酒と不摂生のため病気がちで養護施設を転々とした。時々詩を書いて少しの金を稼ぎながら、国から救済金を貰い、娼婦にも養ってもらっていた。専門家に言わせると初期の詩はすばらしいが、晩年の詩はあまり評価されていないらしい。それでもいろんな詩人が彼を見守り応援していた。

ある晩、彼は同棲中の娼婦と喧嘩をする。彼女は怒って出ていく。翌朝帰ってみるとヴェルレーヌはベッドから落ちたまま死んでいた、ということらしい。寒い冬の朝だった。友人たちが駆けつけた。マラルメが遠いフォンテンブローから駆けつけた時はデスマスクをとっている時だった。葬儀はすぐ近くの教会、サンテイエヌ・デュ・モンというパリの護り神の由緒ある教会で執り行われた。当時の詩王といわれたポール・フォールが葬儀の様子を詩に書いている。息子は参加しなかった。さんざん母親を苦しめ悲しませたからだった。

そのアバルトマンを見上げながら、この階段を今すぐにも上って行きたいなど楽しい感慨にふけっていると、レストランから出てきた男が僕にもう一つのプレートを指してくれた。「日本の作家、辻邦生が住んでいた」と書かれている。近くのソルボンヌ大学で教えていたこともあったらしい。普通は生きていけば書かれないと思うが、その時はまだ彼は亡くなつてはいなかったと思う。僕は彼の作品はあまり好きではない。何冊か読んだが何の感動もない。物書きとしての格の差は大きいにもかかわらず、僕は生意気にもその建物に住んだ辻邦生に嫉妬を感じた。

## 「二」パリのヘミングウェイ

さらにもう一つのプレートを見つけた時、僕はもう一度感動した。「ヘミングウェイここに住む」とある。彼もまた、ヴェルレーヌからなにかのインスピレーションを貰おうとここに住んだのだろうか。彼のエッセイ集、彼はこれを小説として読んでもらってもいいと言っているが「移動祝祭日」はパリでの生活が書かれている。日々の生活はもとより、季節移り変わり、歎び、悲しみ、友人たちとの交流、青春が生き生きと書かれている。アフリカ猛獣狩りやスペイン闘牛などの豪快な思い出が呼び起こす彼よりも、パリでのややセンチメンタルな感じさえするこの本が僕は好きだ。彼が終日座ってタイプを打っていたカフェ、好きな友人と会うカフェ、懐かしい通りや広場、僕は夢中になって読んだものだった。ただ彼の心情やあたりの雰囲気を感じることが出来ても横文字の固有名詞はもうすっかり忘れてしまっていた。それらが瞬時に蘇ってくる。彼はここに住んでいたのか。パリに来る前にもう一度「移動祝祭日」を読んでおくのだった。

僕の興奮は高まるばかりだった。すると、あのムフタル通りがデカルト通りに別れる角が「コントルスカルプ広場」ではないか。真ん中に大きな桐の樹が二本立っている。その周りを向かい合った二つのいつも混んでいるカフェとイタリアレストランと通りが囲んでいる。春の終わりころになると、美しい紫の桐の花が咲く。彼はその日によって変えたどちらかのカフェで作品を書きながら座っている。夜は街灯に花の紫が浮かび上がるはずだ。若者たちのおしゃべりや笑い声は雑音ではなく楽しい喧騒だ。時折りワイングラスが割れる音がするがそれも美しい。

「移動祝祭日」から情景の心情の文章を引用したいが限りがない。が、一つだけ心に残

る作品を思い出す。小説「キリマンジャロの雪」の中でアフリカで死にかけている青年が思い出すのがこの場所だ。ベッドで身動きできない主人公はただ死を待つだけだ。テントの外ではハイエナがうろつきながら彼の死を待っている。次第に弱っていく意識の中で彼は思い出す。

「パリで彼がそこほど愛した街は他にはなかった。あの枝を伸ばした木々、古ぼけた白い家並、舗道に流れている紫色の花の染料、高台からセーヌへ下る急な坂道や、ムフタール通りのごたごたした界限、もう一つはパンテオンの……。」  
「コントルスカルプ広場のことはとても書きおこせるものではない。そこで花売りは花を染料で染め、その染料が舗道に流れ……。」  
「いつも娼婦や老人は安いぶどう酒を飲んで酔っ払っていた。子供たちは寒さに水漬をたらしていた……。」

キリマンジャロの青年は、ヴェルレーヌが死んだという建物の一番上を借りたと書いてある。そこからパリ中の屋根と煙突とあらゆる高台が見えたと。雨の降る日は、ヴェルレーヌの詩のようにポトポトとトタン屋根を打つ音が聞こえただろう。また彼はいつも書いている。寒いパリに春がやってこようとしてなかなか来ない時がとても悲しい、と。作品を書きながら自信に満ちていたかどうか、生活の心配と才能への不安がどのように彼を捉えていたのだろうか。

二、三年前だったか、アメリカ映画で「ミッドナイト・イン・パリ」というのを観た。

なぜかやむなく三回も観るはめになった。同じ映画を三回も観るのは初めてだったが悪い気はしなかった。主人公がヘミングウェイ、ピカソ、ガートルード・スタイン、フィッツジェラルド、ゼルダ、その時代の踊り子ジョセフィン・ペーカーなどと会う一九二〇年代へのタイムスリップの物語だ。

また懐かしい場面がいくつもあった。主人公とヘミングウェイが初めて会うのが「ポリドール」というサンジェルマンデプレの古いレストランだ。ガイド本で、昔の詩人たちがよく通っていたと読んだことがあったので何度か行った。料理は安くてボリュームがありいつも満員だ。昼の日替わり定食は学生にも人気がある。壁には一八四八年創業と書いてある。僕自身もそこでまた貧乏だった頃のヘミングウェイと出会ったような気がした。初対面の人にはやや不遜な態度に見えるが、内面はナイーブなセンチメンタルな青年だった。他にも、ヘミングウェイが通ったというレストランはガイドブックには沢山掲載されている。高級なホテルリッツのアメリカンバー、リュクサンブール公園の南端にある、クローズリー・デ・リラ、サンジェルマンデプレのリップ、など。どれも彼が成功してから通った店ではないだろうか。どの店もギャルソンは威張っている。

「三」ムフタール通りのほかのこと

「ラ・メゾン・ヴェルレーヌ」の小道を挟んだ向かいに「バー バトリーヴル」がある。「酔いどれ船」と訳される。ランボーが十六歳と少して書いた最高傑作のひとつである長詩だ。その名前を付けたには違いない。ランボーが故郷のシャルルヴィルからヴェルレーヌにこの詩を送る。感動したヴェルレーヌはランボーに「偉大なる、魂よ、来給え、

パリへ」と手紙を送る。ヴェルレーヌはこのようなすばらしい詩を書く男は、三十代のインテリ、着こなしも素晴らしい堂々とした男、と想像していたらしい。ところが初対面のランボーは服は汚い髪はぼさぼさ、しかも少年、ということに驚く。ただしその美少年ぶりにさらに驚く。

店は狭い。入り口のドアのガラスには破れかけた紙が貼ってあるが、それは「酔いどれ船」の詩。中は小さな立ち飲みテーブルが二つ、四、五人用のテーブルと椅子、あとはカウンターに四名ほどしか座れない。壁は漆喰が剥げ落ちた煉瓦、煤けた天井にはランボーの顔が書いてある。客は学生ばかりだろう、音楽は激しいロックだ。ウイスキーを頼むと、なんでこんなところに老けた日本人が一人で、と不思議そうに無愛想に運んでくる。しかし僕は満足である。彼らの仲間にとってもなつた気分になる。

その後このバーにはしばしば来たが、ある時がっかりした。いつの間にかテレビが入り、サッカートの試合中継をしている。若者でいっぱい盛り上がっている。それからは入ったことがない。前を通り「バトリーヴル」という店の名前を見るだけで満足するしか仕方がない。

ついでだが、セーヌ川の島、サンルイ島にやはり「バトリーヴル」というバーを見つけた。普通の静かな店だった。しかしここもしばらくして行くと、インターネットカフェに変わっていた。フランス人の友人に聞くと、心配いらぬ、フランス中に「バトリーヴル」という店は沢山ある、とのことだった。

近くにはパリ大学の校舎がばらばらにあるので、通りのそばには学生食堂もある。誰でも入れるが少しは価格が違うのかどうかまでは確かめていない。自分で選んで行ってフル

コースにもなる。安いのでしばしば使った。がそれもある時に駄目になった。学生証とそれにお金をチャージしておかないと利用できなくなった。9・11以降のことだ。何でも少しずつ変わって行く。

#### 「四」パンテオン

どちらかというところ裏通りのような、ムフタール、デカルト通りから表へ出ると、今は丘とも言えない街並みのジュヌヴィエーヴの丘に大きなドームのパンテオンが立っている。日本語では「聖廟」「万神殿」といわれる。地下にはフランスの偉人たちの棺が納められている。フランス革命の時に決められたそうだ。文学者で言うと、デュマ、ユーゴー、マルロー、ヴォルテール、ゾラなど。他にはキューリー夫妻。

数年前にミッテラン大統領の国葬でパンテオンに埋葬される儀式をテレビで見た。厳粛だった。また最近では、当時の大統領のサルコジがカミュをそこに入れたいと言いつつカミュの双子の子供の姉が政治利用されそうだと反対した。弟は乗り気だったらしいが。

一階は大きなドームの敞かな空間のままで床には水が張ってある。十九世紀の中ごろ、フーコーという物理学者が天井からおもりを吊るし振り子の角度が変わって行く様を観測し、地球の自転を証明した。

パンテオンの正面に彫られているのは「偉人」というフランス語で、その名前のホテルがパンテオンの右にある。一度前を通りかかったら、「ブルトンなどシュールレアリスト達がここに集まった」と書いてある表示があった。高そうなホテルだったのでロビーには入れなかった。シュールに関して興味がある程度読んだが、深くのめり込んではい

ないのでその程度で終わった。

パンテオンとホテルの間の歩道では、散歩するたびに貧しい女性が毛布にくるまって物乞いをしているのを見かけた。ある雨の夕方濡れながら毛布を被って寝ていた。もう亡くなっているだろう。二年ほど前のことだ。

パンテオンに向かって左には古典の劇作家、コルネーユの美しい像が立っている。ラシーヌ、モリエールと並んで評価される作家らしいが読んだ記憶がない。その像の向こうに先に述べた、サンテイエヌ・デュ・モンという古い教会がある。ヴェルレーヌの葬式があつた教会でなんとなく雰囲気の良い教会なのでよくそこに座って時間を過ごしたものだ。ある夕方、訪れると沢山の人が音楽を聴いている。パイプオルガン演奏「トッカータとフーガ」だった。CDではいつも聴いているものの本物のパイプオルガンは初めてだった。僕は感動する。その荘厳な響きは神への捧げものではなく、僕にはむしろ人を地底深く引きずり込もうとする得体のしれない力に思われた。その深淵にさらに深く音が鳴り渡っていく。しかしその果ては暗黒ではない。美しい無限の虚空である。それに引きずり込まれまいと逃げようとするが人の力ではもうどうしようもない。逃れようとする意志を無視して、音楽は強引な力で聴く者が虚無に墜ちていく愉楽の誘惑を奏でる。

ぼくは次の作品の内容がどうあれ、「トッカータとフーガ」という題名にすることに決めた。いつ書きあがることになるかわからないままだったが。

#### 「五」スフロ通り

パンテオンを背にして、なだらかに下っていくスフロ通り「パンテオンの設計者の名

前」を見下ろすと先にあるのがリユクサンブル公園の緑だ。そのずっと先にはエッフェル塔が見える。夜になるとそれは光る。九時など丁度の時間には煌めく。

スフロ通りの中ほどを横切っているのがサンジャック通り。パリでは相当に古い通りである。その右手に曲がるとソルボンヌ大学の裏口がある。表に回ると学生たちがたむろする広場にカフェがならぶ。年に一日、十月にパトリモワヌという日には国内の国立の建物を誰でも見学できる。ある年、エリゼー宮に行こうと思つたが、行列で待ち時間が四時間と言われてやめた。そのかわりにソルボンヌ大学の見学をした。図書室、会議室、教室、講堂など、中庭にはユーゴーの大きな像があつた。若い頃そこで勉強しようと思つたことも思い出す。

路地に入ると小さな映画館が二軒ほどあり、一か月間の黒沢月間とか、オールナイトピートだけしなどもあつたりする。古い白黒の、ジェラルド・フィリップ、ブリジッド・バルドーなど有名な俳優のデビュー作品なども観ることが出来る。老夫婦が順番を待って並んでいる。安いので僕もしばしば通つた。

スフロ通りを横切っているサンジャック通りを左に曲がると、古きよき時代を髣髴とさせる界限に出会う。歴史のあるワイン屋、古本、地元の料理屋からヴェトナム、中華、チベット、トルコ料理屋、八百屋、肉屋がぎっしり並んでいる。その先がゲイ・リュサック通りにあうところが大学の水産学部で建物の玄関の上には蛸の飾りがある。最近では日本と同じキンコースのようなコピー屋も、ネットカフェも並んでいる。

十五世紀、ソルボンヌ大学を卒業した、フランソワ・ヴィヨンという詩人が喧嘩の末ある司祭を殺したというのがこの通りである。学生時代から無頼狼藉ものだった彼は卒業し

ても窃盗強盗団から抜け出せず、無宿人、いかがわしい宿の常連でこのあたりを根城にして暗躍していた。何度もつかまり、牢獄でも詩を書き、ついには死刑判決を受けるが恩赦で出る。そして十年間のパリ追放、そのうちに人知れず消えて行った。どこかで殺され捨てられたままだったのだろう。彼の残したのは音韻をきれいにとった美しい古詩である。彼は千四百三十年生まれ。その時代とは、ジャンヌ・ダルクが処刑された頃、その十年あとグーテンベルグが印刷術を発明、その十年後にレオナルド・ダ・ビンチが生まれた、という頃である。

高名な日本の先生が書いている。「吉野信夫」天沢退二郎の本より

「ご存じのごとく、往古のフランソアヴィヨンは威風堂々と酒場から酒場へと飲み歩いては略奪を行い、そこには群衆の歓呼の声の雑踏と、風塵のような狂える華麗な街の殺戮があった。」

今はその華やかさはないが、舗道の一枚一枚にまで古さを感じながら歩く。勿論当時はパンテオンもリュクサンブル公園もない。闇夜に猥雑な妖艶な繁華街が浮かぶ。

リルケも初めてパリに出てきた時はこの辺のホテルに泊まったらしいが、調べていなくてどこかわからない。ポール・ヴァレリーの最初のパリもこのあたりだった。ホテルの名前は分かったが残っていないかった。普通のあまり変わり映えのしないアパルトマンの壁に、「ここにピカソが住んでいた」というプレートを見つけたこともあった。

妻が死んだ後、お手伝いに来ていた兄の娘を、すなわち姪っ子を犯し妊娠させてパリへ

逃げて来ていた島崎藤村もこの通りのホテルに泊まっている。小説「新生」に詳しく書いている。リュクサンブル公園の薔薇園も彼のお気に入りだった。サンジャック通りの果てのポール・ロワイヤル通りにあたる近くに彼のアパルトマンはあった。普通の建物だが僕には懐かしい。「初恋」や「千曲川」の詩、「破戒」などの小説もいいが、この「新生」は身近に感じられて胸を打つ。

このポール・ロワイヤル通りを右に行くとモンパルナス、左手すぐにサンテ刑務所がある。この刑務所については次の機会にいろいろ書きたい。

パンテオンと向かいあったリュクサンブル公園は僕の好きな公園のひとつである。宮殿、泉、薔薇園、花壇、小劇場、音楽堂、乗馬、ペタンク場がある。春には広場以外を木々の緑とマロニエの純白の花々が覆う。数十もある胸像、ヴェルレーヌ、ボードレル、ヴェートーベン、サンド、どれも一流である。メデイシスの泉の周りには椅子に座って何時間も水を眺めている人、老人も若者も。時々、鳩の糞が肩に落ちてくるのもかまわずにかつてジャン・バルジャンが幼いコゼットを毎日散歩に連れて行ったのがこの公園だった。マリウスはその時からこの二人には度々会うのだが、特別な興味は持っていない。ところがある時、成長したコゼットは突然、美しい女性に変身していたのだ。

昼になると、僕はサンドイッチと缶ビールを持ってそこへ行く。花壇の前のいい場所をとると居座る。ウオークマンと本と昼寝で時には八時間もそこに座っていることがある。シンフォニーはマラーやブルックナーに浸る。本は何度目かのドストエフスキー、いつかゆつくり読んでみたかったトーマス・マン。昔日本にいたという老人が話しかけてきたりする。またある時、誰かが僕に小石を投げつけたのではないかと思ったこともある。時

間をおいて時々小石が飛んでくる。人種差別か、と身構える。なんのことはないそれは、マロニエの実がはじけて落ちてきたのだった。

休日は野外音楽堂で演奏がある。みんな気ままに聴いている。勿論無料なのだが、費用はどこから出ているのか。パリ市の観光課などの予算だろうか。

夏の夕方は遅くまで明るい。九時くらいにやっと薄暗くなる。陽の落ちるそれまでの時間の空は例えようもなく美しい水色に透き通る。もう何も考えずにじっと空を見ている、暗くなる前に警官が笛を鳴らして閉庭を知らせてまわるまで。秋になると門の外で大抵がアラブの若者が焼き栗を売っている。いい匂いがする。

パンテオンの手前右手にパリ五区の区役所がある。それにつながって古いが立派な大きなアパルトマンがある。一階には葉草屋があつて、ウインドウに時代遅れの葉の天秤が飾つてある。不思議な光景だ。横はカフェ、その横は銀行。そのアパルトマンを六回までエレベーターで昇り、狭い階段をさらに二階歩くと屋根裏部屋がある。二メートル×三メートル四方の部屋。石造りだからしつかりしている。分厚いドア。斜めの屋根と床の隙間にマットレスを引いてあるのがベッド。三十センチの四角の天窓が一つ。雨が降る朝は隙間から落ちてくる水滴に顔を愛撫され目が覚める。いつも壁に頭をぶつける。一応、近代的に改装しているので小さなシャワーとトイレ、流しとコンロが備わっている。野菜を刻んで少しのご飯をまぜて作るおかゆが朝食だ。今でも玉葱の匂いを嗅ぐと懐かしさが蘇る。

天窓を開けると法学部が見える。朝早くから夜は九時くらいまで授業があつている。学生の頃「いとこ同志」という映画を観た。ジャン・クロード・ブリアリという俳優、ニヒ

ルで遊び人が通う法学部だ。その玄関が見える。

その横がジュヌヴィエーヴ国立図書館。学生たちが勉強している。順番待ちの列もある。参考までに行くことにした。入り口で登録しなければならぬ。写真もその場で撮つてくれる。職業欄に「詩人」と書いた。その頃僕はランボーの本を書いていて、「パリ・コンミューン」について調べたいと思つていたのでその本を見つけると辞書を持つて通うことにした。ほとんど単語の意味を調べるだけだったが、かなり参考になった。コピーも自由にとれた。

朝早く天窓を開けると、パンテオンの後ろから昇る真っ赤な神秘的な朝焼けが美しい。落ちる夕陽は建物にさえぎられて見えないが、その光がパリの反対側の東のはずれの丘に建つ集合住宅の窓ガラスや、近辺の教会の尖塔に映え、激しく燃えるようだった。暗くなると遠くのモンマルトルの丘に建つサクレ・クール寺院がライトアップされているのが見える。何とも物悲しい。

仕事を引退し、七十歳近くになってやっと僕はここに來ることが出来た。年に三か月ずつ、三年間をここで過ごした。しかしもう昔あこがれた貧乏学生詩人ではありえない。実業に身を費やしてきた人生だったが、悔いはないにしてもぬぐいきれない虚しさは残っている。今更仕方がないにしても、まだ学び、読み、書かねばならない。

続く